

『DANWASHITSU』

～小さな講演会が地域の大学を発信する～

DANWASHITSU運営委員会

環境計画学科

環境・建築デザイン専攻

『DANWASHITSU』とは建築・環境デザインの学生有志が運営する講演会の名称です。「ながら「談話」をするかのような雰囲気の中で、現在活躍されているあらゆる「創り手」の方々とざっくばらんに語り合う場を大学の中に設けたい」という想いの下に1999年から定期的に講演会を開催しています。『DANWASHITSU』の具体的なコンセプトは以下の三つです。

学生が直接ゲストと対話できる距離感を大切に
する。

単にゲストの話を聞くのではなく、『地域性』
や『環境』をテーマとし、あらゆる「作り手」
から多様な『環境観』、『地域観』なるものをあ
ぶりだす。

学年のみならず学生・教員の枠を超えた運営を
継続し、滋賀県立大学の環境・建築デザインの
存在を全国に発信する。

『DANWASHITSU』では、今までの7年間で23
回の講演会を開催してきました。これまでのゲスト
は建築家のみならず、照明デザイナーから陶芸家、
写真家まで多岐に渡ります。開催は不定期ですが毎
年4、5回程度の開催を目指しており、B棟2F談話
室において1時間半程度のスライドショーの後、2時
間程度の懇親会を行っています。この約4時間は学
生・教員・ゲストがフラットな立場でものづくり
に対する想いを語り合うエキサイティングな時間
が繰り広げられます。

設立当初は完全に独立採算で運営を行ってきた
のですが、昨年度からは専攻の先生方から資金的
援助をいただけることになり、より充実した体制
のもとで活動を行うことができました。学生の思
いつきから始まった小さな講演会『DANWASHITSU』
は学内の建築学生の誰もが知っている存在であり、
もはや環境・建築デザイン専攻における伝統にも
なりつつあります。

2006年度のゲストは、宮城俊作氏（ランド
スケープアーキテクト）、藤本壮介氏（建築家）、
山田脩二氏（写真家）、ヨコミゾマコト氏（建築家）を

お招きしました。それらの講演会の様子を運営委員
の視点からレポート風に紹介したいと思います。

「庭と風景のあいだ」 ゲスト：宮城俊作氏
（ランドスケープアーキテクト）



2006年度DANWASHITSUの最初のゲストと
して、ランドスケープアーキテクトの宮城俊作氏を
お招きした。前半の講演会では、これまでに宮城
さんが携わってこられたプロジェクトを中心に、ス
ライドを流す形式で行われた。それらの仕事の幅
は多岐に渡るものであり、ランドスケープに関し
て無知である僕に、その職能の広がりを見せてい
るかのよう思えた。これら一連の作品の説明で、
共通して聞くことができたのは、ランドスケープ
におけるディテールの話ではないだろうか。そこ
には、建築とはまた違う、生きたものを扱って
いるランドスケープならではの緻密なデザインが
あり興味深かった。

宮城さんのデザインするものからは、いかに
その場所に呼応して、外への広がりを意識してい
るのかがよくわかる。平等院宝物館などは、特
にそうしたことが感じられた。

また、宮城さんがここ数十年の仕事をと
おして念頭においている3つの問い、つまり・
風景を造ることができるのか？・「建設」は
唯一の創造行為か？・環境の「現実」は
デザインに値しないものか？という問いは、
ランドスケープアーキテクトの

職能観の確信にせまるもので、宮城さんはそこに建築との差異をみいだせると言われていたのが印象的だった。

後半は布野先生、松岡先生、学生を交えて懇親会が行われた。講演会とはまた違った和やかな雰囲気、学生の質問を中心にたくさんの話題がでていた。中でも自然とは何かをめぐっての話では活発な議論が交わされていた。人工と自然とのニュアンスは非常に微妙であるとした上で宮城さん自身は、やはり人の手が加わっている里山のような風景に美しい自然を感じると言われていたのが心に残る。

普段、なかなか第一線でご活躍されている外部の建築家と直に話す機会の少ない学生にとって、非常に刺激あるものになったのではないだろうか。

(4回生 石野啓太)

「新しい座標系」 ゲスト：藤本壮介（建築家）



7月の暑い頃、今注目の建築家である藤本壮介氏をDANWASHITSU講演会に招いた。その著名さと長身のスタイルとは裏腹に、非常に気さくで穏やかな口調で話が始められた。

「住む人に合わせる機能主義ではなく、もともとあるものから人が機能性を見出していく住み方のほうが豊かなのではないか」。藤本氏はプロジェクト毎に軸となるテーマを打ち出して説明されたが、これは一貫して言われたことだった。我々建てる側が家をつくっていくだけでなく、住む側もつくることで始めて完成する。とりわけ、初期の代表作N-houseの話は衝撃的だった。床の無い建物は使う人によって大きく左右される。人と人との新たな関係が強く意識される。他にもFinal Wooden Houseをはじめ、彼の話す作品のプロセスや思いに触れると、徐々にその概念を実感することができた。

そして、藤本氏独特の説明の手段として度々登場するのが、五線のない楽譜である。最近になってピアノを始めたというから驚きである。彼曰く、五線

と小節は絶対時間を示し、五線のない楽譜はそれぞれの音に固有の時間が流れているのだという。音楽をする者にとって、小節はなくてはならない要素であると同時に、人によって変化の無いものである。一方、音符は人それぞれに変化し音を楽しむためには欠かせない。話を聞いているうちに、その音符の自由さこそが藤本氏の目指す新しい座標系なのかもしれないと思った。

また、自分の目指す建築を話す時、「二人」「居場所」という言葉を多用されていた。二人というのはコミュニケーションがうまれる最少の人数である。と同時に、最も親密に関係が築き上げる単位でもある。座標系というと、一見とても大きな単位で考えられているのかと思われるが、こういった小さなものの積み重ねによって全ての関係が生まれると思う。建物をつくるのも人間であるし、空間を利用するのも人間。ものづくりにとって一番大切なものは人。言葉にすると当たり前のことではあるが、今回の講演でそれを改めて見つめ直すことができた。

(3回生 岸本千佳)

「この国の津々浦々の景観の品格 風化する素材(瓦)の品格」 ゲスト：山田脩二氏（写真家）



「建築家はバカだ」そんな衝撃的な言葉で山田さんの講演はスタートした。会議室で2時間、談話室で2時間。独特の山田節で、終始笑いの絶えない講演となった。

はじめに、山田さんはマイクを持って前に立ち、ポスターより少し長くなった講演のタイトルを自らホワイトボードに書き

出した。「この国の津々浦々の景観の品格 風化する素材(瓦)の品格」。

山田さんの目に映る今の日本の景観、建築とはいったいどんなものなのだろう。そして、山田さんの言う“品格”とはなんだろうか。

カシャカシャと映写機が懐かしい音を立てながら、

たくさんの写真をスクリーンに映し出した。カメラマンであり、瓦職人である山田さん。そんな変わった肩書きを持つ山田さんは視点もやっぱり変わっていた。東京ドームも都会のビルも富士山も、山田さんが作ると全部瓦葺になってしまいうらしい。そんな冗談を交えながら、山田さんは会場を和んだ雰囲気

に。山田さんが「これはいいね」と言って見せてくれる瓦や石、流木は、本当に何気なくて一見どこにでもあるように感じられる。しかし、それらは人工では作り出せないような形、朽ち方、素材感を持っていて、誰もが不思議と美しいと感じる。山田さんが講演中何度も口にした“品格”がそこにはあるのかもしれない。私たち現代人は、日本のあちこちに高いビルやマンションを建設する一方で、山や川、水田の広がる風景に心を和ませ、それらを求めて観光に行ったりする。“品格”のない景観が生まれるのは、このような矛盾した行動を起こす現代人の品格のなさに起因しているのかもしれない。そして、そんな危険性を山田さんはカメラのフィルターをとおして私たちに教えてくれている。

後半の談話室での懇親会では、お酒を交えながら学生から様々な質問がされた。話の中心は、山田さんの若い頃から現在に至るまでの様々な経験の話から自然と写真についての話に・・・。

「写真は芸術じゃない、芸術として撮るのは自己満足だ」と語った山田さん。実際に世間で評価されている写真家がそう考えていることに驚いた。なぜなら、写真家の撮る写真というのはたいてい、その写真一枚にその人らしい表現がアーティストックにされているものだと思っていたからだ。けれど山田さんは、「カメラマンは自分の表現が出来るものではない」と言う。山田さんの言う写真は、「どういう風にコピーをされて、いかに世間に見せるか」という工業製品としての役割をするものだった。そして、「カメラマンはただ忠実にコピーするのではなく、いかにうそをつくか」が重要であると言う。そんな山田さんの話を聞いて、アートコンプレックスを少なからず私も持っていたことに気づかされた。

今、芸術的な要素が強くなった現代の写真のあり方を、そして写真に限らず建築においても、もう一度その果たすべき役割について原点に戻り見直す必要があると感じた。(3回生 吉岡あすか)

「単純な複雑さ」ゲスト：ヨコミゾマコト氏（建築家）



ヨコミゾマコトさんと言えば最近では富弘美術館で日本建築学会最優秀賞を受賞し、名実ともに日本のトップ建築家である。そのスター建築家が滋賀県立大学に来る事になった。ヨコミゾさんは県大の講演会場に、白いシャツとパンツに、黒いロングコートという、雑誌で見た彼と全くかわらない爽やかな出で立ちで、颯爽とやってきた。ヨコミゾさんの講演会はこれまでの作品のスライドが中心だった。ヨコミゾさんが作品についてどのように考えて設計したかをひとつひとつ、丁寧に説明する姿は、温和なヨコミゾさんの人柄がよく出ていた。彼の作品は住宅から集合住宅、美術館まで多岐にわたる。「非階級性・非全体性」や「単純な仕組みと複雑さ」、「自己最適化」など、ヨコミゾさん独特の言葉を織り交ぜ、分かりやすく説明してくれた。

一番興味深かったのは、懇親会での「建築を工芸品のようにつくるのは嫌い」という発言だった。ブルータルな表現にするのは嫌いだと言う。コンクリートはコンクリートらしさ、鉄は鉄らしさを、彼は求めているようだ。コンクリートは表面がザラザラしていて、素手で触ると怪我するくらいでもいい、と言っていたのには驚いた。ヨコミゾさんは建築を、すごくきれいにつくる人だと思っていたのに、ヨコミゾさんの意外な一面を見ることができたと感じた。

(4回生 宮窪翔一)

「環境観と地域観」を映し出す鏡として

『DANWASHITSU』でゲストの方が話すテーマは、毎回ゲストの方がそのとき最も興味のある事を話してもらっている。そのためレクチャーの内容は多岐に渡る。しかし最後に全てのゲストに対して共通に聞いている2つの質問がある。それは「地域で建築を学ぶ可能性と危険性」そして「あなたにとって環境とは何か」というものだ。ゲストの回答は

様々であり、そこでは外部からの視点、都市からの視点で様々な環境観や地域観を伝えてくれる。学生の中には地域の大学で建築を学んでいる意味や価値を見いだせなくなるものも多い。また、学内の講義だけではそのことをなかなか実感できないということも事実であろう。『DANWASHITSU』とは、学生が教員やゲストと対等な立場で、自分たちのいる「環境」の意味を相対的に確認できる場所なのである。そして、そこには「地域」だからこそ実感できる「同時代性」が確かに映し出されている。

『DANWASHITSU』は今後も学生主導で活動を継続していく予定である。

(卒業生中川雄介)